

宗教的ニューカマーと地域社会

——外来宗教はホスト社会といかなる関係を構築するのか——

三 木 英

△論文要旨▽ 現代日本では外国籍の住民が増え、それに伴って日本人に馴染み薄い宗教の施設も増加することになっている。ブラジル福音主義キリスト教やイスラームがその宗教の代表であるが、それらの現状は日系人やムスリムだけが集う、孤立した信仰共同体にとどまっている。それら共同体に日本人信者は僅かしかおらず、教会やモスクの所在する地域の住民が、それらに入りすることはない。とはいえ宗教的なニューカマーもホスト社会に無関心であるかといえ、そうではない。彼らは日本人・日本社会に向け活動し、メッセージを発信しているのである。その働き掛けは現時では一方的なもので、多くの日本人はその現実には気づいてはいない。しかし現代日本が多文化共生をその課題とする限り、日本人がニューカマーによる活動・メッセージを認識することは必要であろう。宗教的なニューカマーは国内に増加している。彼らと日本人との間の協働関係構築の可能性は、探究するに値しよう。

△キーワード▽ 宗教的ニューカマー、ブラジル教会、イスラーム、共生

一 外来宗教への着目

いま、日本に暮らす外国籍の人々の数は多い。近年の不況、そして東日本大震災後の混乱の影響によって離日する者が少なくないとはいえ、われわれが暮らす地域のなかに、多くの海外からの移民は暮らしている。本稿は、この移民たちの宗教に照準を合わせている。すべての移民が宗教的な生活を送っているというわけではないが、移民

のなかに篤く宗教的な者は確実に存在する。来日後に信仰心に目覚めるようになった者も、相当数に上るようである。

その彼らが奉じる宗教のほとんどは、国境を越えるグローバルな移住の活性化とともに日本にもたらされた、日本人がこれまで知るところの少なかった「外来宗教」である。移民たちは日本のあちこちに、その居住地の近辺で宗教的な絆を結びあい、独自の信仰共同体を形成しているのである。

異文化社会で生活を送りながら信仰し続けられる宗教は、移民にとって何物にも替えがたい大切なものであるに相違ない。その大切に行っているものを、ホスト社会の人間は理解する必要があるのではないか。理解し、その上で信仰を共有せよというのでは勿論ない。「宗教の創りだす絆」を移民が大切に思う理由を、ホスト社会の人間は理解すべきではないかといいたいのである。

移民たちの多くは日本で厳しい生活を送る社会的弱者（マイノリティ）である。その彼らは、日本がその経済を下支えする役割を期待して受け入れた、日本人にとっての「新たな隣人」である。もちろん、商用や国際業務・学問研究に従事するため来日し在留する人々も少なくなく、その彼らを社会的弱者と認識することには支障がある。日本に暮らす外国籍の人々の事情は多様である。いずれであれ、グローバル化の進行する現代にあって、移民とホスト社会の人間との間には良好な共生関係を築くことが求められていよう。そのためには何より、ホスト社会の側による彼らの理解が必須である。理解不足は、無用のトラブルを生じさせる元である。

宗教は、その理解にあたっての重要な鍵となる。日本で、日本人の知るところの少ない外来宗教への信仰を続ける限り、彼らは宗教に何らかの救い・慰安を求めているのだろう。その求めるところを理解することは、彼らが置

かれている状況を知ることにつながる。そして外来宗教の施設は、国内に明らかに増加している。宗教を必要とする移民が増加していると理解できる。だからこそ、本稿は着目するのである。

移民は居住地近くに信仰共同体の拠点を築き、そこに定期的に参集している。その地域社会で、移民たちはどのような思いを抱き、活動を展開しているのか、以下に報告しよう。

二 増加するニューカマーと外来宗教

まず、現代日本に暮らす外国籍の人々について、その基本的なところを把握しておこう。表題のニューカマーとはオールドカマーとは区別して用いられる言葉で、オールドカマーが主に戦前に日本に移住してきた人々を総称するものであるに対し、ニューカマーは一九八〇年代以降に移住してきた人々をいう。とくに一九九〇年以降、その増加は顕著である。

九〇年は「出入国管理及び難民認定法（入管法）」の改定法が施行された年である。八〇年代半ばからのバブル経済の高まりは日本人の間に3K（きつい・きたない・危険）といわれる職種を忌避する傾向を生み、また少子高齢化の進展によって、日本はとりわけ製造業における——単純労働に従事する——深刻なマンパワー不足という問題を抱えるようになっていた。それに対する一つの施策が、入管法の改定だったのである。改定入管法では、日本に在留するにあたっての資格として新たに「定住者」が設けられた。「定住者」は「法務大臣が特別な理由を考慮し一定の在留期間を指定して居住を認める者」で、彼らに対しては日本国内のどこで、どのような職業に就くことも自由であるとされたのである。そしてこの資格は、「日本人の子として出生した者の実子（であって素行が善良

であるものに係るもの」「日本人の子として出生した者でかつて日本国民として本邦に本籍を有したことがあるものの実子の実子（であって素行が善良であるものに係るもの）、すなわち日系三世までに適用され、さらにその家族にも適用された。その結果に、主にブラジルやペルーに暮らす日系人の還流が始まったのである。当時の南米における深刻なインフレーションも、彼らの日本への渡航を後押しした。

また、「開発途上国への技術・技能移転を目的とする」研修・技能実習制度が整備され、「研修」「技能実習」資格によって在留する者も増加した。中国出身者が最も顕著であり、インドネシア人も多い。彼らについて、本来「学ぶ」ことを目的としていたはずが実際上は安価な労働力として就労させられるというケースが少なくなかったことは、新聞等の報道が教えるところである。（禁止されている）残業の強要、不当な低賃金労働、（職場離脱を防ぐための）パスポート取り上げや貯蓄強制、監禁・暴力等の人権侵害が露見し、問題化することもあった⁽¹⁾。この現実もまた、日本における労働力不足が招いたものである。

「留学」「就学」資格により在留する者が急増したことは、いうまでもない。二〇〇八年に自民党政権下で謳われた「（二〇二〇年を目途とした）留学生三〇万人計画」が示す通り、海外から学生を招き入れることは国策であった。いま日本に学ぶ学生の過半数を中国籍の者が占め、韓国・朝鮮籍がそれに続く。国内の専門学校・大学で学ぶ彼らの存在なくしては経営が立ち行かない学校法人もあることは、周知のことであろう。

そして経済のグローバル化に伴い、日本でビジネス活動に従う人々も増加していった。IT能力を評価されて日本で働くインド人技術者が東京・西葛西に集住すること、中古車輸出を生業とするニューカマー（とくにパキスタン人）の経営する店舗が富山県の国道八号線沿いに連なることなどは、よく知られているだろう。

宗教的ニューカマーと地域社会

表1 外国人登録者数, および登録者数の
総人口に占める割合の推移

	外国人登録者数	総人口に占める割合
1955	641,482人	0.71%
1965	665,989	0.67
1975	751,842	0.67
1985	850,612	0.70
1990	1,075,317	0.87
1995	1,362,371	1.08
2000	1,686,444	1.33
2005	2,011,555	1.57
2008	2,217,426	1.74
2009	2,186,121	1.71
2010	2,134,151	1.67

* 法務省入国管理局統計をもとに作表した

表2 外国籍住民の国籍別割合 (2010)

中国	687,156人	32%
韓国・朝鮮	565,989	26
ブラジル	230,552	11
フィリピン	210,181	10
ペルー	54,636	3
米国	50,667	2
ベトナム	41,781	2
タイ	41,279	2
インドネシア	24,895	1
インド	22,497	1
その他	204,518	10

* 法務省入国管理局統計をもとに作表した

法務省入国管理局の統計によれば、二〇一〇年末現在の外国人登録者数は二一三万四一五一人を数える⁽²⁾。表1はその数値および総人口中に占める彼らの割合の推移を示したものである。二〇〇八年をピークに漸減傾向のみえるものの、二百万を超える数値は半世紀前の三倍強である。

現在の外国籍住民のうち(香港、台湾を含む)中国は全体の三三%を占め、韓国・朝鮮、ブラジル、フィリピンが続く、これらの国籍者で全体の八割を占める(表2)。登録者が最も多く居住するのは東京都(四一八〇一二)人で、以下、愛知(二〇万四八三六)人、大阪(二〇万六九五)人、神奈川(一六万九四〇五)人、埼玉(一二万三三三七)人、千葉(一二万四二五四)人、兵庫(二〇万三八七)人、静岡(八万六一五八)人、茨城(五万四四三九)人、京都(五万二七四二)人

がトッペンで全体の七一・二%を占めている。生活利便で仕事の見つけやすい大都市圏、そして自動車産業を筆頭とする製造業の盛んな地域に、移民たちが多く暮らしていることがわかる。なお大阪、京都、兵庫における登録者の過半数は韓国・朝鮮籍で、その大部分が特別永住者である。

一九八〇年以降に来日した移民のなかには、日本でも宗教的な生活を営み続ける者、また日本で生活するなか信仰心に目覚めることになった者が確実に存在している。その彼らが宗教的ニューカマーである。そして彼らは寄り集まり、日本には新参の（ニューカマーである）宗教を信奉する共同体が形成されてゆく。いま、日本に活動を開するようになった外来宗教として、ブラジル系の福音主義キリスト教、フィリピン発祥のキリスト教系教団（イグレシア・ニ・クリスト *Iglesia Ni Cristo*）、韓国系キリスト教、イスラーム⁽³⁾、上座仏教（タイ、スリランカ仏教）、台湾仏教、新宗教（韓国系の甌山道・圓仏教、ブラジルのウンバンダ *Umbanda*）他をあげることができる。

それらすべてをここで取り上げることが不可能であるため、以下では、ブラジル系福音主義キリスト教、そしてイスラームを取り上げ、詳述する。前者はニューカマーのなかの大勢力であるブラジル人が信仰し、各地に教会を設けて活発な活動を展開しているからであり、後者の礼拝所であるモスクの数が、ここ二〇年で全国に急増しているからである。それらに対する調査で得た知見から、宗教的ニューカマーがホスト社会とどう関わっているか、関わろうとしているかを報告し、考察を加えよう。

三 ブラジル系福音主義キリスト教

ニューカマーといえばブラジル出身者が第一に想起されよう。一九七五年の彼らは僅かに一四一人であったと

ころ、八六年に二〇〇〇人台となり、八八年には四一五九、翌八九年には一万四五二八人にまで伸びている。九〇年は五万六四二九人⁽⁴⁾で、九一年には一万九三三三人と一挙に倍増しているが、これが入管法改定の影響であることはいうまでもない。九六年に二〇万人台に突入すると、二〇〇五年は三〇万人台となり、二〇〇七年の三一万六九六七人をピークに漸減に転じている。二〇一〇年末で国内に暮らす滞日ブラジル人は二三万五五二人である。愛知県居住者が最も多く（五万八六〇六人）、静岡県に三万六七〇六人を数え、その他に一人台のブラジル人口を群馬県、埼玉県、神奈川県、岐阜県、三重県が擁している。以上の七県在住者で滞日ブラジル人全体の七割を占める。

本国ブラジルではカトリックが多数派であるが、プロテスタントの伸長が近年著しい。日本でもプロテスタント——中南米ではプロテスタントは福音派 (Evangelico) と総称されており、本稿でも以下、それに準ずる——教会が前述の地域を中心に数多く設立されている。そしてそのブラジル系福音主義キリスト教の多くがペンテコステ系、つまり聖霊の働きを強調するキリスト教で、その活動の活発なることは本国と同じである。

いま、日本に設立されているブラジル系の福音主義教会（以下、ブラジル教会と表記する）そしてその信者の正確な数は不明である。そのほとんどが宗教法人格を取得していないからである。一つの推計を——山田政信による鈴鹿市・四日市市における調査⁽⁵⁾を参考にして——呈示すると、信者は一万八〇〇〇～二万人、教会数は二六〇～三五〇となるうか。このうち、幾つかの事例を——ホスト社会との接点に極力焦点を合わせて——紹介しよう。なお、事例には調査を実施した日付を記載している。ブラジル教会の場合、牧師・責任者の帰国や転居により移転あるいは閉鎖されることがまあり、本稿執筆時も調査時と変わらない場所で、旧と同じ活動を続けているとは限らないか

らである。

【事例①】 グレースコミュニティ国際教会⁽⁶⁾ (Grace Community International Church) (調査日：二〇〇九年九月二三日)

ブラジルのバプティスト教会で牧師資格を得たM氏が、二〇〇〇年四月に設立した安城バプティスト教会が前身である。安城教会を本部教会とし、岡崎、豊橋、西尾、四日市、長野県飯島に支部教会を運営する。ブラジルから牧師を招聘することがあるが、ブラジルに本拠を持つ教団の日本ブランチとはいえ、当教会(教団)は独立団体であると認識できる。信者総数は約三〇〇人で、ブラジル人が九五%を占める。二〇歳代が多く、三〇代がそれに次ぐ。男女比はほぼ半々である。

M氏は一九七一年に安城市に生まれ、名古屋大学工学部を卒業後、ブラジルに単身渡って神学校に学び、宣教師の女性と結婚。妻と共に帰国後、生まれ故郷の安城に教会を創設し、教勢を拡大していった。いま教会活動の傍ら、岡崎市内に行政書士事務所を開き、不動産ビジネスも手掛ける。

信者のブラジル人は概して、在ブラジル時には熱心な信仰者ではなかったものの、来日後に病氣・夫婦間のトラブル、子どもの問題など様々な悩みを抱えるようになり、教会に通ううち悩みの解消をみて信者となっていたものである。失業していた信者に仕事が見つかり、また病が癒されたという「奇跡」も少なくないという。

日曜に開催される集会で用いられるのはポルトガル語であるが、本部教会では日本語も使用される。そして土曜には「若者集会」を催し、また「リーダー訓練」の集いも持たれる。この他に——若い、子どもを持つ信者が多いことから——キャンプや合宿などを実施しており、そこでは楽しいイベントも用意されているとのことであった。そして三、四家族から成る、セル・グループと称される少人数での家庭集会の開催が指導され、信者はそ

ここで聖書を学び、終了後には集会参加を呼び掛けるビラ配布を行っている。経済的に困窮した信者を支援する活動にも取り組む。

ブラジル教会の大半の指導者はブラジル人であるが、この事例は日本人が中心的立場にある、比較的珍しい事例である。とはいえ信者に日本人が少ないのは、他のブラジル教会と同じである。多くのブラジル人は日本での生活を送るなか、種々の悩みに煩悶するようになるのだろう。その解消への願いが、教会への参与の動機である。時に語られる「奇跡」は、彼らの悩みの深刻なることを示唆しているだろう。当教団ホームページは教団の家族的であることを謳う。信者は教会を擬似的な家族と認識し、悩みを共有して慰め合う。「若者集会」では信者はM氏夫妻を宗教的な父母とし、その指導を受けるのだろう。またセル・グループも(小)擬似家族と定義されて、そこでキリスト教を学び合い、支え合いが実践される。そして「リーダー訓練」を受けた信者は、既存成員を正しく導くため、また支え合う成員を増やすため、勤しむ。ビラ配布が当教会と日本人社会との接点であるように思われるが、この活動によってどれだけ日本人信者を得ることができたかは、不明である。

【事例②】 ミッソン・アポヨ豊橋教会⁽⁸⁾ (Igreja Evangélica Missão Apoio Toyohashi) (調査日：二〇〇九年二月二八日)

JR二川駅から国道一号線沿いに東に歩いて一五分程度で、以前は自動車修理工場であったかと思われる教会に着く。日本にデカセギに来ていた二人の(義兄弟の関係にある)ブラジル人が一九九三年末に創設した教団「ミッソン・アポヨ」⁽⁹⁾の豊橋教会である。ミッソン・アポヨは日本国内に一七、ブラジルに一七、ポルトガルに三、フィリピンに一つ、教会を持つ国際的な組織に成長しており、豊橋はその一つである。⁽¹⁰⁾

約一二〇人の信者のうち全体の六割が女性で、二〇〜三〇歳代が多いという。教会代表者も若く、ともに二〇

歳代半ばのK夫妻である。ペルー人、ボリビア人が約十名おり、日本人信者も三名いる。ブラジル人女性と交際中の男性、ボリビア人と結婚した女性、そして音楽好きの男性がその日本人で、三名とも若い。

牧師夫妻によれば、日本人が徐々に教会に関心を寄せてくれるようになっていたとのことであった。教会では日本語とポルトガル語を併記し写真を多く掲載した多色刷りのマンスリー・スケジュールを発行している。その紙面には「ミッションアポイオ教会」と教団名が記載されており、ポルトガル語読みでないのは、日本人に教会情報を届けたいという彼らの意向の表れなのであろう。日本語での集会も二〇〇九年から開始された。

活動内容として、ブラジル教会全般で行われる礼拝集会やバプテスマ（洗礼式）、セル・グループでの研鑽の他に、教会でのバンド練習、ダンス、パントマイムや演劇の練習、ボーリング大会、駅前ライブ、子どもの日パーティー、カントリーソング・パーティー等も催されていることがスケジュールに記載されている。ユース・ネットワーク、カップル・ネットワーク、ファミリー・ネットワーク、ウイメンズ・ネットワーク、メンズ・ネットワークの文字もスケジュールには見え、こうした属性を限定しての催しからは信者間のつながりを重視しようとの姿勢がうかがえるだろう。そして「この不況の中で仕事が無く、生活に困っている人たちの為に生活必需品を寄付して下さい！もし困っているのであれば、気軽に電話ください」とも（日本語で）記載され、困窮者支援への取り組みも行われている。

前出の音楽好きの日本人は次の一文を寄せている。「この教会はほんとに素晴らしいです。生バンドによる賛美の演奏、神をテーマにしたパントマイム、ダンス：日本人と外国人の人々が国や文化を越えて家族になれる温かい教会です」。バンド等のパフォーマンス活動は神への賛美の表現であり、聖書の教えのフィジカルな表現と

捉えられているのである。彼に続く日本人がどれだけ現れてくるか、確たることはいえないが、当教会がブラジル人だけを対象とした活動に終始しようと考えていないことは確かなことである。

事例中の女性牧師は六歳で来日しており、その日本語能力に不足はなく、それが活動についての利点となっているだろう。日本語による集会では、彼女が中心的役割を果たす。加えて牧師夫妻の若さが教会の活動を——他のブラジル教会よりも——多彩に、活発にしているようである。日本語で確認できる教会スケジュール、そして音楽、演劇等の重視の方針は日本人への発信力を持つかもしれない。

【事例③】ベレイヤ福音ミッション浜松（都田）教会 (Missão Evangélica Bereana Japão) (調査日：二〇一〇年二月一日)

調査当日は教会が移転した直後で、その開設祝賀の集会の日にあたっており、出席者は一五〇名を超えて盛況であった。挨拶に立った面々に在日本のブラジル・プレスビテリアン教会代表者、(滞日ブラジル人の集住する)群馬県大泉町から来着したブラジル人牧師等、また他のブラジル教会所属の信者たちが集まって来ており、日本においてブラジル教会間の交流が旺盛であることがうかがえた。当教会の信者に限れば、その数は二〇名前後であるとのことであった。

この教会の属す教団は豊川市、掛川市にも教会を持ち、長野県佐久市にも建物を有している。佐久の施設は、この教団によるアジア布教をサポートする拠点で、布教準備や伝道者教育がそこで行われているということである。インド（ゴア）や東ティモール——ともに、かつてポルトガルの統治下にあったところである——での伝道活動を展開しており、同時にそこで孤児支援や学校建設など、社会貢献活動を行っていることは特筆すべきこと

であろう。

この教会に日本人信者はいない。とはいえ、当教会は熱心に日本人対象の布教を行っているようである。日本語のみで書かれたパンフレットを作成し、それを持って日本人宅を訪れ、勧誘をしているのである。努力が実つて日本人が関心を寄せてくれたとしても、その家族が信仰に反対することが多く、成果を挙げるには至っていない状況であるらしい。

大部分のブラジル教会に日本人信者はごく僅かしかない。集会で用いられる言語は、ほぼポルトガル語である。日本語に堪能な日系人は少なく、そして日本人は日本語しか解さない。言語の壁が日系人と日本人との交流を阻む。事例①②では日本語での集会が催されており、それはもとより日本人の指導を意図してのものであるが、日本語に長じた（ポルトガル語能力に乏しい）ブラジル人の子どもが日本語集会に列席するという側面も見逃されてはならない。教会は基本的に、エスニック・チャーチなのである。

ブラジル教会は言語と文化を共有する人々が参集して祈りを捧げる場であり、「信仰による交わり」を形成して支え合う場である。彼らは教会において孤独ではない。交わりのなかで彼らの抱えるストレスや悩みは解消され、彼らは笑顔と活力を取り戻してゆくのだろう。恵まれた「奇跡」を祝福し合う光景も、想像できるところである。ブラジル教会は困窮者に対する経済的支援を行っているが、教会が擬似的な家族であるなら、同信者を支えるのは当然のことなのである。滞日ブラジル人が直面している諸状況を、ここから推し量ることは容易である。

エスニック・チャーチであるブラジル教会そして信者の眼差しは、教会メンバーを含む滞日ブラジル人社会に注がれている。しかし同時に、ブラジル人社会の外に対しても、教会は働き掛けようとしている。日本語で表記され

宗教的ニューカマーと地域社会

たビラの効果はほとんど出ていないとはいえ、彼らは配布を続ける。事例②における音楽、演劇等の重視は、対日本人の地道な勧誘活動に奏効するかもしれない。そして生活支援の活動は、日本人の困窮者に対しても行われている。事例②に言及した困窮者支援の呼び掛け、そして困窮者に呼び掛けるメッセージは、日本語で記されていたはずである。実際、日本人ホームレスを支援するブラジル教会は存在している。教会は、教会が所在する地域社会に対しても、メッセージを発信しているのである。

またブラジル教会は、地域社会を越える活動にも従事している。事例②の教会が属するミッソン・アポヨは（不況下にあり、そのゆえに自殺者の多い）日本と日本人のため三日間断食して祈る、という催しへの参加を教会メンバーに呼び掛けていた。二〇〇八年に開催されたブラジル教会信者大会でのスローガンは「日本の人々に神の栄光と光を」であった。こうした活動、メッセージには、ブラジル人が日本と日本人に寄せる篤い思いがこめられているよう。そしてミッソン・アポヨは、ブラジル本国（さらにはポルトガルやフィリピン）に教会を幾つも設立している。また事例③に見たような、インドや東ティモールでの活動も注目に値する。彼らの視野は地域社会にとどまらず国家レベルにまで、さらにはグローバルに広がる。そしてここにおいて、キリスト教徒でありポルトガル語を操るという彼らの属性——このゆえに日本人との交わりが阻害されるのであるが——は、活きる。

在ブラジルの日系人は概して教育レベルが高く、職業面ではホワイトカラーが、経済階層ではミドルクラスが多いが、⁽¹¹⁾滞日の彼らは不安定な雇用契約と厳しい労働条件を甘受しつつ日々を送る。本来の能力を発揮することができず、彼らは鬱屈することもある。その彼らは教会において支え合う。そして滞日ブラジル人社会の外に向けてのメッセージ発信と社会貢献活動は、彼らの「誇り」を幾分か回復させると考えられるのである。

四 日本におけるイスラーム

一九九〇年以前、日本に設けられていたモスクの数は僅か四つであった。ところが二〇一一年時点で、その数は七〇を超えるまでに急増している(表3)。九〇年以降に来日するムスリムの増加したことがその背景にあることはいうまでもない。二〇一〇年末時点で日本に暮らす外国人登録者の多いイスラーム圏の上位三ヶ国を示せば、インドネシア(二万四八九五人)、パキスタン(二万二九九人)、バングラデシュ(二万二七五人)となる。一九八九年の上記各国の外国人登録者数が順に二七八一、一八七五、二二〇五であるから、その増加の程は明白であろう。もちろんこれら以外に、マレーシア、スリランカ、エジプト、トルコ、アフリカ諸国等々の出身者がおり、日本に暮らすムスリムの国籍は多彩である。

日本におけるムスリムの増加は、一九八〇年代半ばに始まる。この頃からパキスタン、バングラデシュそしてイランからの来日が相次いだのである。上記三ヶ国とも日本との間に査証免除措置が実施されており、観光ビザで来日後に就労して、日本で生活を営むようになっていった者が多かつたようである。⁽¹²⁾ その彼らのなかには、日本人女性と結婚して「日本人の配偶者等」の在留資格を得て定着する者もいた。そして九〇年頃からは、「研修」で来日するインドネシア人が増えてくる。

いま、日本に暮らすムスリムの正確な数は不明である。外国人登録にあたり、信仰する宗教の記載は求められていない。イスラーム圏出身者がすべてムスリムであるとは限らず、またムスリムがマジョリティではない国々出身者にムスリムが皆無であるわけではない。したがって推定となるが、およそ十万という数値を一応の目安としてあ

宗教的ニューカマーと地域社会

表3 日本におけるモスク（2011年9月現在）

地域	モスク所在地
北海道	札幌 小樽
東北	仙台 いわき
関東	小山 足利 鹿沼 伊勢崎2 館林2 水戸 小美玉2 ひたちなか つくば 千葉 市川 山武 さいたま 坂戸 越谷 春日部 戸田 八潮 川越 所沢 四つ木 東浅草 台東 南大塚 渋谷区大山町 歌舞伎町 元麻布 目黒 蒲田 町田 八王子 横浜 海老名
中部	甲州 長野県坂城町 新潟2 射水 富士 浜松 名古屋2 豊田 瀬戸 安城 春日井 一宮 愛知県飛鳥村 各務原 岐阜 大垣
近畿	津 京都 大阪 茨木 神戸
中国	岡山 東広島
四国	高松 徳島 新居浜 松山
九州	福岡 別府

* 浜中彰「国内主要礼拝所（マスジド）と団体」（<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/benri/benri/index.htm>）をもとに作表した。所在地 計71

* ゴシック体で表示された4つは、1990年以前に設置されていたものである。

* 表中にはモスクの他に、ムサッラーと称されるものも含まれている。両者ともイスラームにおける礼拝所の意であるが、モスクが恒久的な礼拝所のイメージであるのに対し、ムサッラーは将来的に移設される可能性があり且つ小規模というニュアンスを持つ。

げておこう。日本人ムスリムについては約一万と捉えておく。⁽¹³⁾ その日本人ムスリムの多くは、ムスリムと結婚した日本人女性であると考えられる。

ムスリムは金曜に集団で礼拝することが勧められており、勢い、滞日ムスリムは祈りの場である自分たちのモスクの開堂を念願するようになる。その開堂されたモスクを幾つか調査のために訪れていると、祈りに集まるムスリムの多くが当該地域でビジネス活動（研修、技能実習を含む）に携わる者であるモスクと、大学に籍を置く学生・研究者が多くを占めるモスクのあることに気づく。以下では名古屋モスクを前者の、大阪茨木モスクを後者の事例として——日本人・日本社会との関係に極力照準を合わせて——呈示する。なお、事例に調査日を記してはいない。モスク

はブラジル教会と異なり、いったん開堂されると移転・廃止されるケースは少ないからである。調査は二〇〇八年から一一年にかけて行われた。

【事例④】名古屋モスク⁽¹⁴⁾

名古屋市営地下鉄の本陣駅近く、オフィスビルと住宅が混在する地域に、一九九八年に完成した名古屋モスクの四階建てビルはある。一階は事務室と（礼拝前の清めのための）ウドウの水場、二階は女性の、そして三・四階は男性の礼拝スペースである。当モスクはイスラームに改宗した際の登録書を発行し、また随時イスラーム・カウンセリングを実施しており、名古屋市内に約三〇〇〇人といわれるムスリムの拠点となっている。

金曜礼拝には平均三〇〇名が訪れるというこのモスクでは、様々な催しが行われている。コーラン（アル・クルアーン）やアラビア語の勉強会、イスラームに関わるセミナーの開催、日本人ムスリマによる勉強会、（ムスリマに限定しない）女性のお茶会等である。子どもを対象とした勉強会もある。

当モスクを訪れる日本人は数十人おり、国際結婚をした女性を中心である。その彼女たちが自分たちのため、そして子どものための勉強会を主催する。良き信徒となるために、そして良き信徒を育て上げるために、彼女たちは精励しているのである。そしてお茶会では、非信徒も交えて穏やかな時を過ごす。イスラームを日本人に知らしめたいという思いが、このリラックスした集まりを開く動機にある。

モスクは一義的に、祈りの場である。ムスリムたちは定められた礼拝時間の前にモスクを訪れ、礼拝を終えて三々五々帰途に就く。モスクは個々のムスリムにとって祈るために立ち寄る「空間」であればそれでよく、当該モスクにムスリムが所属するというわけではない。モスクに——礼拝での導師であるイマームを除き——指導者はお

らず、したがって（指導者を中心とした、モスクに集まるムスリム全員を糾合しての）組織的な活動が立案・実施される必然性はない。既述の女性たちの催しは、彼女たちが自主的に開催しているもので、モスクはそのための空間を提供しているにすぎない。コーランやアラビア語の勉強会に出席義務があるわけではなく、その気のある者だけが学びに来ればよい。興味を持った非信徒の日本人も若干おり、彼らはムスリムと並んで参加するが、その顔触れは固定的である。

【事例⑤】茨木モスク⁽¹⁵⁾

茨木市郊外の集落に築後十年ばかりの二階建て民家がある。これが二〇〇六年に買い取られ、茨木モスクは開堂された。モスク近辺は水田や畑も数多く残り、鄙びた風情を漂わせるが、大阪モノレール豊川駅はそう遠くない。大阪大学吹田キャンパスも自動車で十分程度の距離にあり、国際協力機構（JICA）大阪も近い。

建物一階の畳敷きスペースが礼拝の場となっているが、メッカの方角を示すミフラーブは設けられていない。

二階部分は女性と子どものための礼拝スペースである。金曜礼拝参加者は二五〜四〇名程度で、その八割が大阪大学（大学院）に所属する学生・研究者であるという。

当モスクは、通常の礼拝の他、毎土曜に成人男性と子どものためのコーランやアラビア語の勉強会を開催しており、関心を持つ者なら誰でも受け入れることをアピールしている。勉強会終了後は手作り料理を囲みでの懇談である。女性による祈りの集まりも土曜に行われており、十名前後の参加者があるという。

茨木モスクは地域社会との交流に積極的である。「国際親善友好の夕食会」を開催して非信徒と交流し、毎秋開かれる地元イベントではチャイやサモサを売る屋台を出店している。また近隣のコリア国際学園の生徒を対象

に、イスラームについてのレクチャーをモスク関係者が行う。二〇一〇年からは先述の学園や地元住民を巻き込
 んでのフットサル大会が開催されるようになっていたが、モスクは大阪イスラム文化センターとして主催団体の
 一つとなっている。

近所に突然現れることになったモスクに、住民は戸惑ったに違いない。そのモスクは住民が気軽に出入りしよう
 という気になるものではなく、彼らは遠巻きにモスクを見ているという現況であろう。地域住民との間にトラブル
 が生じないよう、ムスリムは注意を払い続けている。ゴミ出しルールを守るよう、駐車違反をしないよう、騒音を
 出さないよう留意するとは、全国の他のモスクも等しく心掛けているところである。そして茨木モスクの催す勉強
 会は、日本の大部分のモスクも同種のものである。それは何より研鑽を志すムスリムのためのものである
 が、興味を抱く日本人に対しても開かれているものである。しかしそこに足を運ぶ日本人は少なく、その彼らが固
 定客というべき存在であることも全国のモスクに共通している。ムスリムたちはときに、あまりにイスラームにつ
 いての知識を欠く日本人たちの社会に暮らすなか、不愉快な経験をするところがあるのだろう。イスラームを日本人
 に知ってほしいという願いを、彼らは総じて抱く。だからこそ勉強会を日本人にも開放し、「イスラム文化センタ
 ー」の別称を用いるのであろう。

もともと、彼らがイスラーム「文化」普及のため組織的活動に着手しているかといえば、それは疑問である。イ
 スラーム紹介の日本語によるパンフレットや書籍は、モスクを訪れた——訪れる人は少ないが——日本人に持ち帰
 られることがあるだけである。日本人への布教の試みは、尚更ない。ブラジル教会信者とは異なり、モスクの外に
 働き掛けようとの意欲において、ムスリムは乏しい⁽¹⁶⁾。

ムスリムたちは基本的に、閉じられた信仰共同体を形成している。そして彼らの間にイスラーム文化普及の組織的取り組みがなされないのは、ムスリムが個々に神と向き合う生活こそイスラーム的ゆえに組織結成の気運が高まりにくいからであり、言語の壁という問題がそれを阻むからだろう。加えて、滞日ムスリムが日本での生活にブラジル人ほどの厳しさを感じていない、ということも一因であると推測できる⁽¹⁷⁾。日本での生活にある程度の満足感を覚える限り、彼らはモスクで支え合う必要はなく、また「誇り」の回復を——組織の力に依って日本社会に働き掛けるなかで——模索する必要はない。イスラームと地域社会とが交わることのない状態は続く。

ただ事例⑤の茨木モスクは、地域社会との関係が疎遠でない点において特異である。茨木モスクに集まるムスリムの多くが若い学生であるために彼らは開放的で、ゆえに地域との関係を構築しやすいと考えることは可能であるが、他地区の学生中心のモスクに茨木ほどの実績はない。茨木のケースでは、モスクと地域社会をつなぐ「媒介者」の存在することがポイントである。そして、モスク周辺が人権問題への意識の極めて高い地域であるという特殊な事情が、重要なファクターになっていると考えられる。ここに言及された媒介者は人権問題に鋭敏な日本人男性で、ムスリムではない。その彼が宗教的マイノリティであるイスラーム（ムスリム）に注目し、モスクを地域の住民や同地域内の（民族的マイノリティの集う）学園へとつないで、事例に述べたような交流を現実化しているのである。すなわち、茨木モスクにおける地域との交流の活発さは、モスク側のリーダーシップによるものではない。とはいえモスクは、舞い込んできた交流の機会を得て、それに乗じ、イスラームを日本人（さらには朝鮮・韓国人）に知らしめる機会を得ていることになる。さらに付記するなら、茨木モスクのケースで実際に交流が行われる場所は学校の教室であり、グラウンドであり、また「地域住民の福祉向上、地域交流の促進及び学習活動を推進

し、あらゆる人権問題の速やかな解決を目指した地域に密着した「コミュニティセンター」の一室である。非信徒はモスク内であり、モスク外の、非宗教的なセッティングでならムスリムと交流することに躊躇は少ないだろう。モスク外に利用可能な施設のあったことが、交流を現実化しえた条件であったともいえる。そしてそのセッティングは、前記媒介者が準備したものである。

五 ニューカマーと日本人との交わりの可能性

教会に集うブラジル人は教会を越えての働き掛けの意欲を見せる。地域社会のため、日本のために貢献すべく行動している。しかし、その成果が現れつつあるとはいえない。そしてムスリムは、日本人にイスラーム理解を求める願いを持ちながら、その点において積極的であるとはいえない。ブラジル教会もモスクも、日本社会のなかの「飛び地」のような存在であり続けている。ブラジル教会とモスクを拠点に形成されている信仰共同体は、ホスト社会と交差するところが現時において小さい。

宗教的ニューカマーの思いは、日本人には届いていない。しかし彼らは——その顔触れは変わってゆくかもしれないが——日本人のすぐ傍らに暮らす。そして宗教的ニューカマーは日本に増えてきている。彼らとの間に良好な共生関係を築こうとするのであれば、日本人は彼らの思いを知って理解する必要がある。だからといって、彼らの宗教の教えを（入信しないまでも）理解すべきであるとはまだ、日本人に提言することは難しい。宗教・教団離れが喧伝される現代日本にあって、宗教、それも馴染みのない外来宗教に敢えて接触する者が多数現れようとは思えない。

自身の宗教を強く奉じるニューカマーと日本人とが関係を構築することは、果たして可能なであろうか。ここで谷富夫の議論に着目しよう。谷は「民族性を顕在させながら、他民族と結合することはいかにして可能か」⁽¹⁸⁾を問い、「地域などの社会構造の中で、民族役割以外のさまざまな地位―役割関係を迂回路として、その過程で互いの民族性を尊重しながら共同関係を形成する、そうした『バイパス結合』の可能性」⁽¹⁹⁾を検討している。そして「たとえば同じ地域の住民、職場の同僚、同じ信仰の持ち主、同じ趣味サークルの会員等々として、まずは共通の関心（インタレスト）に基づく協働関係（symbiosis）を持つことから、顕在的結合関係への道は開かれる」⁽²⁰⁾と主張している。これにしたがえば、同じ地域の住民同士であるニューカマーと日本人とが関心を共有し、それに基づいて協働してゆくなら、両者が結合する未来への扉は開かれる。

そして共有されうる関心は、宗教的ニューカマーの側が既に準備している。困窮者支援、音楽や演劇等のパフォーマンス活動、海外での社会貢献活動、そして異（宗教）文化学習がそれである。これらに現に取り組んでいる日本人は多いだろう。ここにおいてなら日本人はニューカマーと協働することができるのではないか。いうまでもなく、宗教抜きで、そしてそれをニューカマー側が承認した上で、であるが。パフォーマンス活動に関しては、事例②が示すように、ささやかな協働関係の萌芽が見えるといえるかもしれない。

とはいえ、「協働」まではまだ遠い。宗教的ニューカマーが取り組んでいる活動そして日本人を招き入れようとしているプログラムのあることを、日本人は知らないからである。閉じられた信仰共同体内部の情報であるから、それは無理のないところであるが、この問題をクリアする手掛かりは事例⑤に求められるだろう。すなわち、外来宗教と地域社会とを媒介する存在が、協働に至るまでの距離を縮めるはずである。その人物には、ニューカマー側

の情報をもスト社会に伝え、両者の間に接点をつくるという役割が期待される。媒介者が両者の交流の場を宗教施設の外に設けうるなら、なお望ましい。

この媒介役に相応しい人材の乏しいがゆえに、現時点での交流は不活発なのである。外来宗教に関わろうとする日本人は、まだまだ少ない。日本社会との交渉をこなせるニューカマーも——言語の壁が立ちあがるがゆえに——少ない。もともと、事例①と②における牧師、事例④における日本人ムスリマのような、日本人にして外来宗教を信仰する人物、また言葉の壁を苦にしない信仰者は確かに存在しており、彼らの活躍が目ざれるところである。ただ、その数が現時点では乏しい。

将来的には、ホスト社会の日本人のなかから媒介者が現れてくる可能性は小さくない。そしてニューカマーの側からは、媒介者は着実に登場してくるよう考えられる。ブラジル教会であれモスクであれ、移民第一世代すなわち親世代は彼らの子どもを良きキリスト教徒、良きムスリムに育て上げたいと願っている。この両者だけではなく、宗教的ニューカマーはすべて、同じ思いを抱いているはずである。そして若い世代は、親の世代の思いを受け継ぎ、教会やモスクにおいて中心的存在になるほどに成長してゆくにつれ、自分たちの宗教的拠点が「飛び地」の状態であり続けることに満足しないかもしれない。若い移民第二世代は日本語・日本文化に親しみ、かつ祖国の言語や（宗教）文化を知る世代である。二つの社会・文化を往き来できるという点で、媒介者としての素養は備わっている。移民第二世代と親しい関係を持つ日本人も、徐々に増えてゆくだろう。その日本人は知己の集まる外来宗教施設を訪れることに、先行世代より躊躇うことはないはずである。その彼らも、候補となる。

こうした媒介者に導かれ、いずれ多くの宗教的ニューカマーが教会やモスクの外へと出てくる。そして非宗教的

なセッティングのもと、関心の共有で結びついた出会いが実現してゆくならば、ニューカマーと日本人との交わりの可能性は高まる。そうなれば、日本人によるニューカマーへの肯定的評価は高まろう。そして交わるからこそ、両者の間にトラブルの発生する可能性も高まってゆく。交わりの密度の低いところに、摩擦は生じないものである。トラブルは抑えられねばならない。日本社会はこれから、ニューカマー第二世代の成長とともに、多(宗教)文化共生をめぐる諸課題に対処しなければならない段階へと、本格的に入ってゆくのである。

註

(1) この事態を受け、研修生・技能実習生の保護のため、入管法の改定が行われている(二〇一〇年)。資格「研修」に加え、新たに「技能実習」が設けられたのである。この新たな資格によって来日する者は、義務づけられた(日本語、日本での生活一般に関する知識、実習生の法的保護に関する情報、円滑な技能修得に資する知識の)講習を受けた後、受け入れ機関(企業)と雇用契約を結ぶ。それにより、技能等修得活動に労働基準法・最低賃金法等の労働関係法令が適用されるようになった。

(2) 以下の外国人登録者に関わる数値は、法務省入国管理局による統計に拠った。詳細はそのホームページ (http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html) を参照のこと。

(3) イスラム教ではなくイスラームと表記する。また礼拝所はアラビア語のマスジドとするべきであるが、人口に膾炙したモスクとする。さらにその信徒はムスリムと表す。なお女性信徒に限定して言及する場合は、彼女たちをムスリマと表記している。

(4) ブラジルから日本へのデカセギは、一九八〇年代前半、第二次世界大戦後にブラジルに移住していた一世の母国への帰還から始まっていた。ブラジルで成功しえなかったため、日本に機会を求めて復帰したという場合が、ほとんどだったようである。その一世たちはブラジルに戻ってから日本での就労斡旋を行なうようになり、それが九〇年の改定入管法施行以前のブラジル国籍者の漸次的増加を促していたのである。八〇年代前半の一世の働きぶりを見た日本の雇用者が、新たな労働力としてブラジル人を認識し、彼らを積極的に雇用したということも増加にあたってのファクターである。詳細は梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』(名古屋大学出版会、二〇〇五年、四一六頁)を参照のこと。

(5) 山田正信「デカセギの宗教活動と社会化」(第六七回日本宗教学会学術大会提出稿、筑波大学、二〇〇八年)に呈示されたデータを基にした推計である。山田によれば、二〇〇六年時点の三重県鈴鹿市・四日市市在住のブラジル人九〇〇〇人のうちカトリック教会に通う者が約五〇〇〇〜六〇〇人(全体の六〜七%)、プロテスタント教会については七〇〇〜八〇〇人(八〜九%)程度であったという。二〇一〇年時点で約三万を数える滞日ブラジル人の八〜九%がプロテスタント教会に通うとすれば、その数値は一万八四〇〇から二万七〇〇人となる。また、山田によるプロテスタント教会調査は一一の教会を対象としており、そこから一教会あたりの信者数を六〇〜七〇程度とするなら、全国に二六〇〜三五〇程度のブラジル系教会が存在していると算出できる。また、(本文中に後述する)日本で創設された福音主義教団ミッソン・アポヨの指導者が刊行する福音主義キリスト教会情報誌(二〇〇八年刊)の巻末には、日本在住の約六〇〇人の牧師名と電話番号が掲載されている。複数のインフォーマントからの情報では、この数値は日本で活動するブラジル系牧師の六〜八割に相当することと、それを根拠に推測すれば当該情報誌刊行時の牧師数は七五〇〜一〇〇〇人となる。二〇〇八年に約三二万を数えた滞日ブラジル人が二〇一〇年では二三万と三割減少していることから、現時の牧師数は五二五〜七〇〇と算出できる。

(6) 当教団のホームページ (<http://www.cgjp.com/jp/>) も、併せ、参照されたい。

(7) 本稿執筆時点で安城教会は閉鎖されており、岡崎教会が本部教会となっている。

(8) 当教会についてはホームページ (<http://www.mactoyohashi.org/>) も併せ、参照されたい。

(9) 二人の創設者のキャリアおよび設立経緯については、前出の山田「デカセギの宗教活動と社会化」に詳しい。また山田政信「デカセギの宗教活動と社会化」(『宗教研究』第三五九号、日本宗教学会、二〇〇九年、四七五〜四七六頁)も参照されたい。ミッソン・アポヨのホームページ (<http://www.missaopoio.com/>) も参照のこと。

(10) 註(9)に記したホームページによれば、いま日本に二四、ブラジル二二、ポルトガル一、ボリビア一、ペルーに六つの教会がある(二〇一一年九月一九日閲覧)。日本とブラジルで増加し、ポルトガルでは減少しているが、ペルーとボリビアに新設されている。またフィリピンの教会は閉鎖されたようである。

(11) 渡辺雅子『ブラジル日系新宗教の展開——異文化布教の課題と実践』東信堂、二〇〇一年、三五―三九頁。

(12) バングラデシュ、パキスタンについては一九八九年一月、イランについては一九九二年四月に査証免除措置が停止された。

(13) 表3作成にあたり依拠した浜中彰による二〇一〇年四月時点での推定である。彼は愛媛県新居浜市においてモスクを自ら設置・運営する日本人ムスリムで、日本に暮らすムスリムのあらゆる面での向上のため、情報発信し提言を行っている人物である。詳細は <http://islam.com/library/jpmuslim1005.htm> を参照のこと。なお桜井啓子『日本のムスリム社会』ちくま新書、

二〇〇三年、二九―三八頁）は、二〇〇〇年末の入国管理局のデータから判断して、その時点での外国人ムスリムを六万三五二人（非正規滞在者も含む）と推定し、日本人ムスリムを六八〇〇程度として、計七万人余りが日本のムスリム人口であると推定している。

(14) モスクのホーム・ページ (<http://nagoyamosque.com/>) も参照のこと。

(15) モスクのホーム・ページ (<http://osakamosque.org/>) も参照のこと。

(16) ムスリムが自主的にグループを組み、中越地震や東日本大震災被災地でボランティア活動に従事していたことを、ここに追記しておこう。神の教えを遵守するムスリムならば困った人に手を差し伸べるのは当然と認識しているからこそその行動であり、彼らは日本人・日本社会と全くの没交渉というわけではない。ただ、こうした働き掛けはムスリム個々の自主的判断によって行われるものである。

(17) 早稲田大学が日本在住のムスリムを対象に実施した質問紙調査の結果（早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室『在日ムスリム調査——関東大都市圏調査 第一次報告書』二〇〇六年）によると、彼らの約七割がその経済状況に満足であると回答しており、日本での生活に適応していると回答する者は八割を超える。「仕事満足度」「家族満足度」「日本人との付き合い満足度」も八割前後が満足を表明している。ただ、この調査は二〇〇五年から二〇〇六年にかけて実施されたもので、日本の経済状況はこの時点からは悪化しており、彼らの満足度は低下しているであろうと推測すべきかもしれない。

(18) 谷富夫「定住外国人における文化変容と文化生成」（宮島喬・加納弘勝編『変容する日本社会と文化』二〇〇二年、東京大学出版会）、二二〇頁。

(19) 同右、二二〇頁。

(20) 同右、二二〇頁。

Religious Newcomers in Local Japanese Society

Relations Between Newly Imported Religions and Host Communities

MIKI Hizuru

In Japan, the number of foreign residents is increasing. At the same time, newly imported religions such as Brazilian evangelicalism and Islam, which are unknown to most Japanese, have established themselves in various regions. Now, they manage isolated religious communities whose members are almost totally limited to Nikkeijin and Muslims. However, in spite of their isolated situation, the religious communities are trying to approach local Japanese society, such as by supporting the Japanese as well as the foreign poor, and praying to God for the salvation of the economically depressed Japan. Most Japanese do not know about and are indifferent to this activity. Insofar as Japan is engaged in considering the issue of symbiosis between Japanese and immigrants, it seems to be necessary for Japanese to recognize the messages the religious newcomers are proclaiming. In light of the situation that there is an increasing number of religious newcomers in Japan, the construction of a co-operative relationship between them and local communities is worthy of investigation.